

## 遊歩者と現代のパリ エリック・アザンの『パリ縦断』 Une traversee de Paris (2016)を読む

著者	小山 尚之
雑誌名	東京海洋大学研究報告
巻	17
ページ	65-71
発行年	2021-03-01
URL	<a href="http://id.nii.ac.jp/1342/00002041/">http://id.nii.ac.jp/1342/00002041/</a>

[資料]

## 遊歩者と現代のパリ

——エリック・アザンの『パリ縦断』 *Une traversée de Paris* (2016)を読む——

小山尚之\*

(Accepted November 26, 2020)

### Stroller and Actual Paris

——Reading of “*Une traversée de Paris*” (2016) of Éric Hazan——

Naoyuki KOYAMA

**Abstract:** By walking from the south of Paris, Ivry, to its north, Saint-Denis, Éric Hazan awakes remembrance of his Parisian life and memories of historical incidents piled in this city. But the areas of modern Paris from the Left Bank to Les Halles lose working-class and intellectual vitality because of neo-liberal renovation and embourgeoisement. On the contrary, from Saint-Denis street to the north, the tenth and eighteenth arrondissements, by its working-class animation in ethnical areas of Africans, Kurdishes, Tamils and Arabs prove that Paris dose not yet become a museum like Venice. In opposition to anti-immigrants discourses in modern France, Hazan attests their charm, gentleness and tenderness.

**Key words:** Éric Hazan, Paris, quartiers populaires, neo-liberalism, rénovation, embourgeoisement

### エリック・アザンの『パリ縦断』 *Une traversée de Paris* (2016)を読む

エリック・アザン Éric Hazan の『パリ縦断』 *Une traversée de Paris* (2016)<sup>1</sup> (未邦訳) は、パリの南にあるイヴリー門から出発し、パリを東西に分かつ子午線にほぼ従いながら北上して、最後はパリの北のサン・ドニ市で終わる遊歩とともに喚起される記憶の記述である。

パリに関してアザンは既に『パリ大全』(2002)<sup>2</sup>を著している。これはパリに関するいわば網羅的な著作であり、特に蜂起や暴動の記憶にも重点を置いたものだった。『縦断』[以後このように略記する]は『大全』の補遺のようなものであり、これと重複する部分は多くある。たとえばオーギュスト・ブランキのことや一八三二年の蜂起また一八四

八年の六月暴動について『大全』から漏れ落ちていた情報が新たに盛られている。

だが『縦断』はそれだけにとどまるものではない。アザンが「パリの人」として生きた記憶が歩きながら想起されている。彼が医者として勤めた病院の記憶、パリの都市計画によって変貌してゆく地区、また現代建築に関する彼の関心などがより前面に押し出されている。パリの子午線上を遊歩しながらアザンは「忘却の境界線上にある」さまざまな記憶の断片を意識にのぼらせ、また未来のことを思い描いている。

『縦断』によるとアザンはパリ五区のラベ・ド・レペ通り一四番地に一九三六年七月に生まれている。父母ともにユダヤ系で、父はエジプトからの移民だった。母はパレス

<sup>1</sup> Éric Hazan, *Une traversée de Paris*, Éditions du Seuil, 2016.

<sup>2</sup> Éric Hazan, *L'Invention de Paris Il n'y a pas de pas perdus*, Éditions du Seuil, 2001 (邦題『パリ大全』、杉村昌昭訳、以文社、二〇一三年)。

チナのペタハ・ティクパで生まれたようだ<sup>3</sup>。一九四〇年に一家はマルセイユに避難し、パリ解放の年(一九四四年)からは一四区のカシーニ通りに引越し、アザンはそこで一八歳まで暮らす。父は一九四五年にフランスに帰化したユダヤ人だったが、パリと『レ・ミゼラブル』をよく知っており、アザンは少年のころ父とともに『レ・ミゼラブル』の舞台を訪ね歩いている。アザンの父は古典を出版することを生業とするアザン出版を経営しており、その出版社はセヌ通りにあった。父の仕事の関係上アザンはメシャン通りにあったユダヤ系のロシア移民によって運営されていた印刷組合にも通っている。そこはシュルレアリストなどの前衛の印刷物を多く手がけたところだった(一九九〇年代に活動停止)。

アザンはリセ・モンテーニュからルイ・ル・グランへ進み、PCB(物理・化学・生物学の略)と呼ばれる医学教育の準備学級に入り、一九五五年にサン・ペール通りの医学部の一年生となる。このころコミュニストの同僚の影響で、同化したブルジョワのユダヤ人の良家の息子として自分に定められていた世界との関係を断ち、コミュニズム運動に足を踏み入れている。ただその当時のコミュニズム運動をすべて「スターリン」という名のもとに覆ってしまう現在の傾向にたいして、アザンは不当であると述べている。

アザンは外科医とくに心臓外科の医者にやがてなることになる。一九五五年の夏半期サルペトリエール病院のアンリ・モンドール(マラルメ研究の大家でもあった)のもとで研修医をつとめ、一九六一年ビシャ病院でセザール・ナルディのもとでインターンをする。かつてデュボワ治療病院と呼ばれた現在のフェルナン・ヴィダル病院ではじめて病院業務にたずさわり、そののちパリ七区のボン・マルシェ近くのラエンネック病院で二十年近くを心臓外科医として勤務する。

しかし一九八一年、救急で呼び出されてダンフェール・ロシュロー広場のロン・ボワンで信号待ちをしていたとき、その中心にあるライオン像を車の中から眺めながら、アザンは外科医を辞め出版業に転じる決意をする。彼はアザン出版を引き継いだのちみずからラ・ファブリック社を運営し今日に至っている。

だがアザンの務めたラエンネック病院は近年閉鎖され、建物にはリノベーション工事が施された。『縦断』の道筋にあるいくつかのパリの病院も同じような運命を蒙っている(同時にパリの監獄も閉鎖または解体されているのだが)。たとえばダンフェール・ロシュロー大通り沿いにあるサン・ヴァンサン・ド・ポール病院。かつて孤児院だったそこは新生児の蘇生術などを施す小児科の専門病院だ

った。しかしここは二〇一一年に閉鎖されたままで今後「エコ・カルチエ」が建設される予定だという。あるいは十八区のクロード・ベルナル病院。もともと感染症対策のための病院だったが、一九七〇年に近隣のビシャ病院に組み入れられ、建物の解体は一九九〇年におこなわれた。その跡地に最近ひとつの地区が建設されたばかりだという。そのほかにもブーシュー病院、ヴォージラル病院、プロカ病院、ブルトノー病院などパリの中の病院が閉鎖されているのである。

何が起きているのか? AP-HP [アシスタンス・ピュブリック・オピトー・ド・パリ] (パリ公立病院連合) が収益性と標準化への配慮からパリの小さな病院を解体している、とアザンは言う。確かにラエンネック病院にも非合理的なところはあったとアザンも認めている。しかし地区に小さな病院があることでその界限は学生や看護婦や見舞客などでにぎわっていたのだ。「これらの小さな病院を解体し、その地所をディベロッパーに売り、ジョルジュ・ポンピドゥー病院のような怪物に取り換える代わりに、地域の必要のために整備することもできたはずだった<sup>4</sup>」とアザンは嘆息している。

パリの「忘却の境界線」にある記憶はたんに歴史的な革命や暴動の記憶だけではないのだ。新自由主義経済の浸透によって駆逐されていく街の記憶でもある。上に述べた病院がすでに忘却の境界線にあるのだ。病院のみならず書店、出版社、新聞社、独立系の映画館も徐々にパリの中心から消えつつある。サン・セヴラン通りのフランソワ・マスペロの「読む喜び」Joie de lire。ソルボンヌ広場の「フランス大学出版」P.U.F。オデオン広場の「モニトゥール」Moniteur。サン・ジェルマン・デ・プレ広場とボナパルト通りの角にあった「ラ・ユヌ」La Hune。一九八四年にアザンがはじめてアザン出版から『デュシャン』を出版した際、発売記念パーティーが開かれた「言い換えると」Autrement dit。これらの書店は今はなく、ブティックや高級品店あるいは「リヨン信用金庫」の代理店などに取って代わられているのである。

パリの六区はかつては出版社の集中する場所だったが、ブルヴァール・サン・ジェルマンとブルヴァール・サン・ミシエルの角にあったアシェット、ラシーヌ通りにあったフラマリオン、サン・シュルピス広場のロベール・ラフォン、ブルヴァール・ラスパイユのラルース、ジャコブ通りのスイユ、ムッシュー・ド・フランス通りのナタンなどは、環状道路近くのガラスと金属のビルに移ってしまう。ガリマール、ミニユイ、ファイヤール、ブルゴワはなんとか元の地に留まってはいる。独立系の映画館もシネ

<sup>3</sup> エリック・アザン『占領ノート』(2006年) 益岡賢

<sup>4</sup> *Une traversée de Paris, op.cit., p.65*

マコンプレクスの増加や配給の集中化によって閉館に追い込まれている。左岸は「商品のフェティシズム<sup>5</sup>」にゆだねられてしまったとアザンは言う。その結果左岸から文学や「知識人」の生活も消えてしまったのである。

一九五〇年代の終わり頃、アザンは五区のモンターニュ・サント・ジュヌヴィエーヴ通りに住んでいた。左岸の植物園からバック通りのあいだにはその当時マリ人やアルジェリア人などの労働者あるいは浮浪者たちが住んでいたとアザンは言う。しかもパリの大学生はたいてい一九六八年五月以前は左岸に集まってきていた。しかし六八年五月以降、アンドレ・マルロー、ジョルジュ・ポンピドゥーなどによって進められたリノベーション事業のおかげで、五区や六区の家賃は高くなり、それによってマリ人やアルジェリア人などの労働者たちは左岸から駆逐される。大学生たちも左岸から離れたヴァンセンヌなどに分散させられてしまう。このような動きとともに左岸にあった現代アート・ギャラリーも一九九〇年代になって大挙して右岸のバスチーユとマレー地区に移住してしまうのである。

リノベーションの波はアンドレ・ブルトンが『ナジャ』の中で「パリでいちばん深くひきこもった場所」と呼んだシテ島のドーフィエヌ広場にも及んでいる。一九七〇年代にドーフィエヌ広場の地下には駐車場がうがたれ、土地はかさ上げされ、広場は敷石の代わりに砂で覆われるようになる。一九九〇年代以降三角形の広場の二辺にレストランが急増する。しかしそれらのレストランは古いビストロの雰囲気を失っている。格子縞のテーブルクロス、フレンチドレッシングあえのポロネギ、ブランケット・ド・ヴォーなどは姿を消しているのだ。

続いてアザンの歩みはパリの右岸に向かう。フランツ・ジュールダンとアンリ・ソヴァージュの傑作サマリテーヌ百貨店は、現在ルイ・ヴィトン・モエ・ヘネシー・グループのベルナルド・アルノーの所有となっており、安全性を理由に閉館したままである。サマリテーヌの改修事業は日本の建築設計事務所 SANAA にゆだねられている。一、二階が商業スペース、その上がオフィス、さらにその上はセーヌ川に面した豪華なホテルとなるそうだが、アザンはその行く末を心配している。「というのもこの建物は建築学的に評価されているので、ここの《外面だけをのこす》、つまり外皮だけをのこした若鳥のように中を空洞にすることは不可能だからだ。手すり、階段といった、アール・デコの貴重な鉄細工のすべては保存されるべきである。それに予定されているフロアと、もともとの建物の穿孔工事を一致させることは容易ではないだろう<sup>6</sup>。」

レ・アールは一九六〇年代まではパリの中央市場だった。ルイ・シュヴァリエはその解体に反対していたが、車の渋

滞と衛生を理由に取り壊され、中央市場は一九七三年にランジスに移転する。その跡地には地下鉄と RER を連結させるための巨大な穴が掘られる。じつはこの巨大な穴の中でマルコ・フェレリ監督、マルチェロ・マストロヤンニ、カトリーヌ・ドヌーヴ主演の映画『白人女に触るな』*Touche pas la femme blanche* が撮影されたのだった。それはウエスタン映画のすぐれたパロディだったとアザンは言う。筆者はそのような大きな穴の存在も知らなかったし、そこで映画が撮影されたことも知らなかった。

その他の部分のレ・アールの建築に関しては、ジスカール・デスタン時代はリカルド・ボフィルに任されていたが、シラクがパリ市長の時にクロード・ヴァスコニとルイ・アトreshuに変更される。「穴」の上には「フォーラム」と呼ばれる商業地区が合資会社 SEMAH のイニシアチブによって建設されていく。現在そこはパトリック・ベルジェとジャック・アンジウッティによる「ラ・カノペ(木々の梢)」に覆われているが、アザンが『縦断』を執筆していた時ははまだ工事中だったので、アザンは「ラ・カノペ」については触れてはいるが評してはいない。しかし同じパトリック・ベルジェとジャック・アンジウッティが建設したブルヴァール・ポール・ロワイヤルとオプセルヴァトワール大通りとアンリ・バルビュス通りの角地の五区の産婦人科病院の拡張部分に対しては、アザンは、近くにヴァル・ド・グラス病院やポール・ロワイヤル病院のアンリ四世時代やアンヌ・ドートリッシュ時代の建築というお手本があったにもかかわらず、それらが建築家たちの灵感の源泉になっていないと苦言を呈している。

アザンは新しい建築をやみくもに否定しているわけではない。たとえば彼はパリ四区にあるレンゾ・ピアノの IRCAM (フランス国立音響音楽研究所) を高く評価している。この建築物は一九二〇年代の公営浴場とうまく隣接して共存し相互浸透している。アザンは言う、「公営浴場の保存が強制だったのか建築家の選択だったのか私は知らない。いずれにしても IRCAM が公営浴場を包みこみ尊重しているやり方、一方の水平帯と他方の鋼材を直線でそろえる配慮、もっとも現代的な建物の正面をボーブールに面するようにではなくタングリとニキ・ド・サン・ファルの泉に面するように配置した聡明さ、資材の選択、これらすべては学識ある慎みを証明している。資材について言おう。ピアノが IRCAM のために使ったテラ・コッタの小さなブロックは、公営浴場の煉瓦とそのままおなじ色であり正確におなじ厚さのものなのだ<sup>7</sup>。」IRCAM は既存の建物と新しい建築がみごとに融合した成功例なのである。

一九七七年に開館したレンゾ・ピアノとリチャード・ロジャースの設計したポンピドゥー・センターはアザンによ

<sup>5</sup> *ibid.*, p.46

<sup>6</sup> *ibid.*, p.64

<sup>7</sup> *ibid.*, p.82

れば「大衆的な」場所だった。しかしこのポンピドゥー・センターも二〇一〇年から二〇一二年のあいだにリノベーションされた。アザンは言う、「一九七七年に開館した大きな建物は長いあいだ大衆的な場所だった。だれも入り口を監視していなかったので、ホールではあらゆるたぐいの人間と、時にはビールの小瓶を片手に、行き交うことができた。外環道路の外に住んでいた連中もエスカレーターに乗って六階からパリの眺めを楽しむことができた。それは創作者の望んでいたことに沿うものだった。[レンゾ・ピアノからの引用]《ポンピドゥー・センターの中に美術館や図書館があるというのは結局のところ大して重要ではありません。ある種の日常性の中で、小さな扉を通る必要もなく、また工場のように検閲されることもなく、人々が出会うようにするべきなのです。わたしたちが遊びの建築やパリを見おろす巨大なメカノをイメージしたのは、接触、ジャンルの混淆、さまざまな活動の重なり合いなどを促進するためなのです。》二〇一〇年から二〇一二年におこなわれたセンターのリノベーションの際、これらすべては良き秩序に変えられてしまった。ヴィジピラト・システムが入場者の選別を助けている。ホールはそぞろ歩きを断念させるように改装されてしまった。エスカレーターは展示会のチケットがなければもう乗れない。そして六階のレストランは値段がほしい三〇ユーロ前後の料理を提供している。これからは私たちはお育ちのよい人々の仲間というわけだ<sup>8</sup>。」

現在のポンピドゥー・センターはリノベーションによってそれが元来有していた大衆性が消されてしまい、良き秩序に取って代わられている、とアザンは言う。加えて彼によればそこで企画される展示会も、最近ではジェフ・クーンズが取り上げられるなど、年々質が低下している。

アザンはレ・アールからサン・ドニ通りを北上する。この通りの周辺の通りは四区のマレ地区からのブルジョワ化の波に徐々にさらされている。「坂道のメスレ通りは、つい最近まで、ほとんどもっぱら靴をあつかう地域だった。靴屋は既製服店を前に少し退いたが、しかしこの大衆的な通りの中に相変わらず存在している。頂上部のきれいなパサージュ・デュ・ポン・トー・ビシュの階段は、ノートル・ダム・ド・ナザレト通りの方へ降っている。この通りの高級食材品店、子供服店、デザイン商品のギャラリー、エレガントな美容室はどれも、マレ地区に接するこの部分の境界に忍び寄るブルジョワ化の徴となっている。三つの平行線のうちの三番目、ヴェール・ボワ通りは、かろうじて災難をまぬがれた。たいへんな金持ちのひとりの男が、この通りをパリでもっともお洒落でもっとも高価な通りにする計画を抱いた。彼はたくさんのブティックを買い占め、そこをギャラリーや豪華レストランにしようとした。最新

の情報によると、この計画は頓挫した。しかしかつての雑貨屋、パン屋、手芸用品店の店先の多くは、格子のうしろでずっと閉じられている。そのため通りはまるで悲しんでいるかのようだ<sup>9</sup>。」

アザンの言うブルジョワ化とは、従来の靴屋、雑貨屋、パン屋、手芸用品店の代わりに、高級食材店、子供服店、デザイン商品、エレガントな美容室、ギャラリー、豪華なレストランが取って代わる現象を指している。サン・ドニ通り周辺のリノベーションの計画はアザンが『縦断』を執筆しているとき頓挫したらしいが、かつての店は格子のうしろで閉じられている。四区のユダヤ人街ロジエ通りもファッションのブティックとゲイ・バーの圧力に押されているという。

しかしサン・ドニ通りからサン・ドニ門を越え、フォーブール・サン・ドニ通りに歩を進めていくとアザンの口調は喜びに満ちたものへ変わってゆく。大衆的なさまざまなエスニック地区、移民街が連なりだすからだ。まず始まるのはアフリカ人街である。「パサージュ・ブラディからシャトー・ドオー通り、そしてその先までは、もっぱら、そして並ぶもののないアフリカ人の美容室の地域だ。パリの中のアフリカの断片だ。ここでは呼び込みが地下鉄の欄干に肘をつきながら雄弁をふるっており、また、女性の理容師は店の中で司祭のようにもものしく振る舞っている。店はあらゆる色彩で飾られ、コトヌーやラゴスで見出せるような「聖霊・美容」Saint-Esprit Cosmétique とか「神のロック」God's Rock といった名前を持っている。アフリカ大陸全体がここに表現されている。英語を話す者もいればフランス語を話す者もあり、ジャマイカ人すらいる。周囲の雰囲気は、たとえもう笑えないようなことが起こりうるとしても、うるさくて友好的だ<sup>10</sup>。」

続いて現れるのはトルコ人街、あるいはクルド人街である。「フォーブール・サン・ドニ通りはトルコ人街、あるいはむしろクルド系トルコ人街の中心となる。カフェでも、レストランでも、八百屋でも、雑貨屋においてすら、イスタンブールの市場と同じもてなしに私たちは出会う。ルイー四世が勝ち誇ってライン川を渡っているサン・ドニ門からほんの数歩のところにオリエントの息吹がある。……。おなじ歩道上に……トルコ語・クルド語の書店が、「メヴラナ」という看板を掲げている。店主が言うにはそれは一三世紀の神秘思想家だそう。ここにはたくさんの宗教関係の書籍の他に、モンテッソーリ教育法の本（トルコ語）やチェ・ゲバラについての本なども見出せる<sup>11</sup>。」

それからかつてアザンが勤務していたフェルナン・ヴィダル病院からラ・シャペル広場までは、インド人、パキスタン人、バングラデシュ人、とりわけタミール人の地区となる。「フェルナン・ヴィダル病院からラ・シャペル広場

<sup>8</sup> *ibid.*, pp.84-85

<sup>9</sup> *ibid.*, p.100

<sup>10</sup> *ibid.*, p.110

<sup>11</sup> *ibid.*, pp.113-114

までのフォーブール・サン・ドニ通りは、かれこれ二〇数年前にできたアジア人街の支柱となっており、それはカイユ、ルイ＝ブラン、ペルドネといった周辺の通りにまで広がっている。極彩色の店で、スパイスのよい香りに包まれながら、安物から純金の装身具や、サリー、ボリウッド映画、生姜、グアバ、私が特定できないあらゆる類の果物を買うことができる。パリジャンはしばしばこの境界を「インド人街」または「パキスタン人街」とすら呼んでいるが、確かに実際ヒンディー語を話すインド人やパキスタンあるいはバングラデシュ生まれの人に出会うことはあるとはいえ、大多数の人はタミール人なのだ。彼らのうちのものは、インドの南東、タミール・ナドゥ（「タミール人の国」）州から来ており、そのもっとも大きな都市がマドラスだ。そのほかの人たちはスリランカ人である——彼らが「タミール・タイガー」による独立の蜂起を支持した人々であり、島の中央政府による虐殺後、その記憶を大切にしていることなど、誰が知ろう？<sup>12</sup>

アザンはフォーブール・サン・ドニ通りの終点ラ・シャペル広場に到着する。その眺めは熱気と活気にあふれている。「もし人がラ・シャペル広場をとてつもない渋滞と騒音と不潔さの場として見ることもあり得るとしても、またそこはしばしばそのように見られているとしても、同時に人は——これは私の場合だが——ここにポエジとある種の甘美さを見出すこともできるはずだ。（「ポエジ」という語はこの『縦断』では一度しか現れないだろう。それは約束する。）ほとんど直線でラ・シャペルを縦断する大きな道路は、まずマルクス・ドルモワの名前を持つ。……住民はアラブ人と黒人だ（タミール人はほとんど一八区に溢れてこない）。彼らは店やカフェと同じように、そしてもちろん、あなたに一本のたばこを求めて来る人々と同じように貧しい。マルクス・ドルモワ通り、それに続くラ・シャペル通りもまた、二〇区のアヴロン通りがそうであるように、プロレタリアの道路だ<sup>13</sup>。」アザンはラ・シャペル広場にポエジを感じながら、ここから先のマルクス・ドルモワ通りというアラブ人とアフリカ人のプロレタリア街へ歩を進めてゆく。

実はアザンはラ・シャペルの隣のバルベス・ロシュアールの近くに住んでいたのだ（現在彼はパリのベルヴィル地区に住んでいるようであるが）。「二一世紀の初め、私は、ブルヴァール・バルベスに通じており、グート・ドール通りのほとんど正面に出る小さな交差道路、ソフィア通りに住んでいた<sup>14</sup>。」ソフィア通りはアラブ人街のグート・ドール地区の近くである。そこで彼は次のような体験をした。「それは私がソフィア通りに住んでいた時のことだ。

日曜日の朝、私は二歳ぐらいだった娘のクレオをベビーカーに乗せて散歩していた。その時、シャルトル通りで、アルジェリア人の老人が彼女の手にキスをしようと身をかがめたのだ。平凡なこと？　これがグート・ドール地区の魅力である<sup>15</sup>。」

かつてエミール・ゾラの『居酒屋』の舞台であったグート・ドール地区はこんにちアラブ人街となっている。そのオリエント的な雰囲気、活気、香辛料の匂い、温かい応接、優しさはアザンを魅了する。

グート・ドール地区の北に行くとアフリカ人街がある。五区から駆逐されたアルジェリア人やマリ人はこの近辺に逃れてきているのだろう。「私はミラ通りを横切り、まったく異なった地区へ入る。ドゥードーヴィル通り、パナマ通り、スエズ通り。布地の極彩色、美容室、レストラン、コンゴのキンジャサから届く新鮮な産物を勧めている卸売商。ギニア湾のあらゆる魚が見出せる（ツバメコノシロ、ティラピア、ソンバト、プラ・プラ、ティオフ……）ドジャン通りの市場。ここはアフリカ人街だ。シャトー・ドオー通りとその美容室とは異なるが、同じように活気があり陽気だ<sup>16</sup>。」

パリの一〇区から一八区にかけて様々な出自の人々の色鮮やかな街区がある。アザンはこれらの地区を「大衆的」と形容する。「大衆的な境界の標識は存在する。まず地下鉄の駅が荒れている。その通路は汚く、エスカレーターはしばしば故障し、出口にはラ・ミュエットやフランクリン・ルーズヴェルトでは未知の不正行為防止のための装置がそなえられている。つねに警官の存在が目につくが、それは金持ちを守るというよりむしろ貧乏人を落ち着かせておくことの方が大切なのを示している。銀行の支店は稀だ。……その代わり、数多くの秘密の場所が、かつて第三世界と呼ばれていた国々への送金を持ちかけている。他のところでは破格の値段で電話することができる。携帯電話の店では端末の「ロック解除」を提供している。スーパーマーケットは「スーパーディスカウント」で、「モノプリ」よりむしろ「リーダー・プライス」や「ディア」である。カフェはカビール人がやっており、たばこ屋は中国人だ。そしてPMU〔場外馬券売り場〕はいつでも人で一杯だ。水曜日になると子供たちの多くは学童保育所に向かう。その多彩な色の列の中の多数派は白人ではない<sup>17</sup>。」

しかしこのような大衆的な地区にもブルジョワ化の波は押し寄せている。アザンはブルジョワ化の過程を具体的に描写してみせる。「まだ一〇年前にはこの境界を満たしていた中国人、アラブ人、いろんな出自の貧乏人たちの近くに、最近では白人の若者たちが住み着いているのが見ら

<sup>12</sup> *ibid.*, p.126

<sup>13</sup> *ibid.*, p.132

<sup>14</sup> *ibid.*, p.135

<sup>15</sup> *ibid.*, p.139

<sup>16</sup> *ibid.*, pp.140-141

<sup>17</sup> *ibid.*, p.154

れる。彼らはそれほど裕福ではないが、その服装コード、ベビーカー、バスケットシューズ、髪型、ポータブル・コンピュータを見ると、ベルヴィルやアリーグルの若者たちと同じように気取っている。その続きがどうなるかはよく知られている。バスチーユで、オーベルカンプフで、ガンベッタで、モントルギユ通りで、サン・マルタン運河に沿って、その続きがあらわれ広がっていくのを私たちは見てきたのだから……。まずカフェが増える。それらはレストランになる。いつの日かそれらのテラスは合流し、途切れることのないテーブルクロスには、クローンで作られたような画一的な若者たちがくっつき合っている。ピオの店、高級食材店、日本料理レストランが開店するのが見られる。続いて、古くからある店、靴の修理屋、文房具屋、アラブの菓子屋は閉店する。それらが再開すると、アート・ギャラリーになっている。展示されている作品の背景の棚にはファイルが並べられ、若者たちはコンピューターのキーを打っている。誰も入ってこないし出て行かない。見るために立ち止まりもしない。これが断末魔の兆候だ。大衆的な境界の終わりである。

ひとつ、またひとつと、ブルジョワ化していった境界に、かれこれ三〇年以上も住んでいるプチ・ブルジョワの私であるから、気に入ろうが入るまいが、結局は自分も加担してきた現象を、批判的に描くことの矛盾は私にも充分わかっている<sup>18</sup>。」

しかしながらパリの一八区においてはこのようなブルジョワ化は限定的なようである。「パジョル通りはわれわれをオリーブ（マルチニークの最初の総督の名前）市場を中心とした極めて小さな地区にみちびく。数年来、パリの屋根付きの市場は、区役所の攻撃的的となっている。区役所はそれらを「文化的な空間」、スポーツや美食その他の空間にしようともくろんでいるのだ。アンファン・ルージュ市場——パリでイーディッシュ語が話されるのが開けた最後の場所のひとつだったが、破壊されたのではないにしても完全に性質を変えてしまった——に続いて、セクレタン市場、それからずっと変わらず皮とビロードに捧げられたものと信じられていた昔のタンブル衣料品市場、これらはその金属とガラスの構造が荒らされてしまい、あれほど役に立つ、あれほどパリの営みが、アメリカの小さな町の「ショッピングモール」の営みとなってしまうのが見られた。さいわいなことにオリーブ市場はその建物と元来の営みを保った。この市場をかこむさまざまな通りは静かで、ラ・シャペルを結合する織目となっているあの一九世紀の労働者街の窓枠に縁どられている。一言でいえばここは「心地よい境界」なのだが、このような場合にはお定まりのことだが、ブルジョワ化のプロセスに従ってはい

19。」

ショッピングモール化をまぬがれたオリーブ市場からアザンは、エヴァンジェル通りを通過してオーベルヴィリエ通りを北上する。外環道近く、ポルト・ド・ラ・シャペルとポルト・ド・ラ・ヴィレットのあいだのブルヴァール・マクドナルドの周囲にかつてあったカルパーソン倉庫の跡地は、レム・コールハウスの建築設計事務所 OMA によって完全に変貌させられている。一五人の建築家がデザインしたユニットがそこに並んでいるのだが、サン・ドニ運河に面したユニットをデザインしたのは隈研吾だ。アザンはこの地区のことを例外的に「以前はこんなに良くなかった<sup>20</sup>」と形容している。

アザンの歩みは外環道で終わらない。彼は高速道路の下をサン・ドニ市に向かって歩いてゆく。外環道によって区切られた、博物館化したパリという一般的なイメージを、アザンは間違っていると言う。一〇区から一八区にかけてのアラブ人やアフリカ人の大衆的な地区はサン・ドニ市まで連続しているのだ。

「[サン・ドニ市の] ジャン・ジョレス広場から、中心街の軸線となる歩道レピュブリック通りが始まる。この通りは、もしこう言うことが可能なら、より雑色にしたフォーブル・デュ・タンブル通りを思わせる——ヴェール、ターバン、ドレッドヘア、三つ編み、野球帽、縁なし帽。すべての若者は、この通りの既製服店、化粧品屋、携帯電話のブロック解除店といった貧しい店のあいだにいる。リズムがゆっくりしていて、雰囲気も平和だ。まるでオリエントの都市にいるようだ。もっとも慧眼な目でもここにブルジョワ化の始まりの兆候を何も検知しないだろう。しかしながらここはゲッターともまるで違うのだ。この通りで生まれたのはまったく別の生活形態なのだ。この通りは一九世紀の労働者用の建物に囲まれており、ここにいると私は、まるでずっとここで育ってきたかのように、わが家にいると感じる<sup>21</sup>。」

しかし現代のフランス人のみながみなアザンのように感じているわけではない。

「こんにち、徐々に数多くのベストセラー作家たちがまたもや郊外の——特にパリの——「イスラム教徒」のことを話題にしている。モーラスがユダヤ人を、デュマ・フィスが蜂起した労働者を扱ったように。このような言説には軽蔑と恐怖の同じような混合が現れている。それにはつねに警察的な要素も加わっているし、われわれの貴重な「価値」を足で踏みじめるものたちに対する強権的なアクションへの多かれ少なかれ明示的な呼びかけも入っている<sup>22</sup>。」

フランス人というアイデンティティ、ユダヤ人という

<sup>18</sup> *ibid.*, p.143

<sup>19</sup> *ibid.*, pp.142-143

<sup>20</sup> *ibid.*, p.146

<sup>21</sup> *ibid.*, p.160

<sup>22</sup> *ibid.*, p.161

アイデンティティーは自分の身に全然似合わない服のようなものだ、とアザンは言う。むしろ自分としては、スタンダールが自身のことを「ミラノの人」と呼んだように、パリの人というアイデンティティーが存在の一番奥底に呼応すると述べている。アザンは、ベストセラー作家たちがまき散らすイスラム教徒にたいする軽蔑と恐怖の混じった瘴気を、パリは振り落とし排出するだろうと信頼している。そして彼の『パリ縦断』はここで終わるのである。

商品フェティシズムにゆだねられ、リノベーションによって知識人の生活がなくなった左岸にたいして、アザンは距離を置いた態度を示している。そこにはもう書店も独立系の映画館も出版社もギャラリーもほとんどないからだ。これに対してアザンは右岸の北部に活気と熱気を見出している。パリはヴェネチアのような歴史的な博物館に凝固しているわけではない。それは今も変貌し続け活力と色彩に溢れている現役の都市なのだ。そしてアザンはそのような「パリの人」を自任しているのである。リノベーションやブルジョワ化の波は右岸の大衆的な地区にも押し寄せているとはいえ、それはいまのところ限定的のようである。

じつは『縦断』はこうしたエスニック街や移民街のことだけを取り上げている本ではなく、アザンの歩みに従ってさまざまなことが想起されている。一八四八年の六月暴動、

パナール・エ・ルヴァッソール自動車工場の跡地、中国人労働者、オーギュスト・ブランキ、レジスタントの処刑地、アザン自身の医者としての、また出版者としての生涯、ポール・ロワイヤル派の教会、コルドリエ・クラブの跡地、ダントンの住居跡、シャトーブリアン、バルザック、ネルヴァル、ボードレル、プルースト、ブルトンらが表現したパリ、ネルヴァルの自殺した場所（シャトレ劇場のカーテンあたり）、一八三二年の蜂起、バリケード、東駅、北駅、ルネ・ガイユステヤクロード・ニコラ・ルドゥー、またアンリ・ソヴァージュらの建築、プレイエル・タワーなど、多岐に渡っている。それらはさりげなく言及されているのだが、読者である筆者はそれらの記述から蒙を啓かれたことが多々あった。特にいままで筆者にとってアンドレ・ブルトンのサン・ジャック塔をめぐる表現に理解しがたい点があったのだが、その周辺に叛徒たちのバリケードが築かれたことをアザンの教示で知ることによって、筆者は初めてブルトンの意味するところが分かったのであった。

しかしこの稿では新自由主義のリノベーションにさらされているエスニック街を活写する『縦断』の部分にあえて焦点をおいてみた。それは同じようなリノベーションの波にさらされ、外国人労働者が年々増えている東京を思っていることである。

## 遊歩者と現代のパリ

### ——エリック・アザンの『パリ縦断』 *Une traversée de Paris* (2016)を読む——

小山尚之

(東京海洋大学大学院海洋科学系海洋政策文化学部門)

パリの南イヴリーから北のサン・ドニまでを縦断するエリック・アザンは、歩みに任せて、自身のパリでの暮らしの思い出やこの都市に積み重なった歴史的な事件の記憶を目覚めさせる。だが左岸からレ・アールにかけての現代のパリは、新自由主義的なリノベーションとブルジョワ化によってかつての大衆的なそして知識人の活気を失っている。これに反してサン・ドニ通りからの北の一〇区から一八区は、アフリカ人、クルド人、タミール人、アラブ人などのエスニック街の大衆的な賑わいによってパリがヴェネチアのような博物館となっていないことを証明している。移民にたいする現代フランスの否定的な言説に対して、アザンは彼らの魅力、心地よさ、優しさを証言している。

キーワード： エリック・アザン、パリ、大衆的な地区、リノベーション、ブルジョワ化